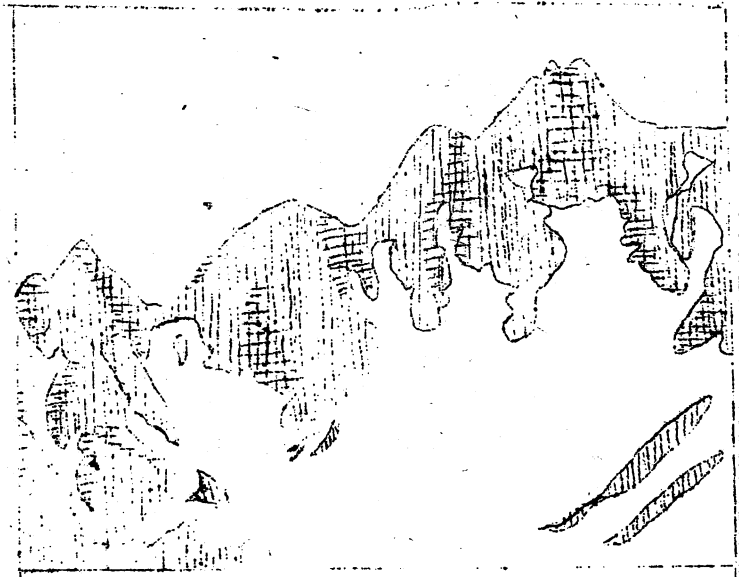


宿 合 入 新

昭和²4年度 S.A.C. 新人合宿

報 告 書



松本
野田
上長

部部部
岳岳岳
山山山

— 目 次 —

1. 合宿の成果と欠陥及び総括
2. 合宿概要
3. 上高地、廻沢概要図
4. 訓練内容
 - ① テニソワーク
 - ② 実技訓練
5. 行動記録
6. 各係報告
7. Leaderの反省
8. 新人の感想

新人哀歌

1. いいぞいいぞとおだてられ 死物狂いて采りおぼし
夕から暁まで飯たきで 景色なんぞは見ておろし
2. チーフは祖くさいサブリーダーは祖母くさい
あとの部員はエロクサイ メッセンジャーは頭を
3. 二年部員は 新米なんかと話好き
地獄の二丁目山で 好んではいる馬鹿もいる
4. 蝶よ花よと育てられ 何の心も知らぬ
ボッカ稼業に身をやつし 泣き止まらぬ雪の山
5. 家へ帰ればお坊ちゃん 山へ入れば新米
何の因果でしごかれる まぶたに浮かぶ涙

1. 合宿の成果と欠陥及び総括
 ① 成果 新人の雪上訓練は充分で、また教が、たとい部てよいの不
 ② 欠陥 ① 準備テニト旧訓練のたいが半並同直重るといふこと、
 ③ 何故、昨年行った総括が、今年見解と、先づのばでしかで、適
 ④ 何故、昨年行った総括が、今年見解と、先づのばでしかで、適
 ⑤ 何故、昨年行った総括が、今年見解と、先づのばでしかで、適

① 新人の雪上訓練は充分で、また教が、たとい部てよいの不
 ② 欠陥 ① 準備テニト旧訓練のたいが半並同直重るといふこと、
 ③ 何故、昨年行った総括が、今年見解と、先づのばでしかで、適
 ④ 何故、昨年行った総括が、今年見解と、先づのばでしかで、適
 ⑤ 何故、昨年行った総括が、今年見解と、先づのばでしかで、適

2. 合宿概要

①目的: 雪上技術訓練と山の基礎知識、山の楽しさを
知る

②期間: 1967年4月29日～5月7日

③場所: 穂高、横尾周辺

④日程: 29日 松本—徳本峠→明神
30日 明神—→横尾(屏風正面) Base

1日 雪上訓練 (屏風頭上は峰の玉山へ)

2日 " (ガイテ.ニより唐沢岳へ)

3日 " 檜ヶ岳へ

4日 沈殿

5日 雪上訓練 (北穂沢より北穂へ)

6日 下山

7日

⑤参加者 新人(新人として参加の2年生3名を含め)
16名

Leader 5名

(その他、各部より文替で常時3～4名参加)

⑥登山本部: 信大本部 厚生課 松本市旭町 (Tel) ③4600

⑦連絡先: 登山部 工学部 厚生課 松本市旭町 Base (Tel) 長野 ②4101

工学部 厚生課 " " ③8106

教育学部 厚生課 " " 上田 ②1215

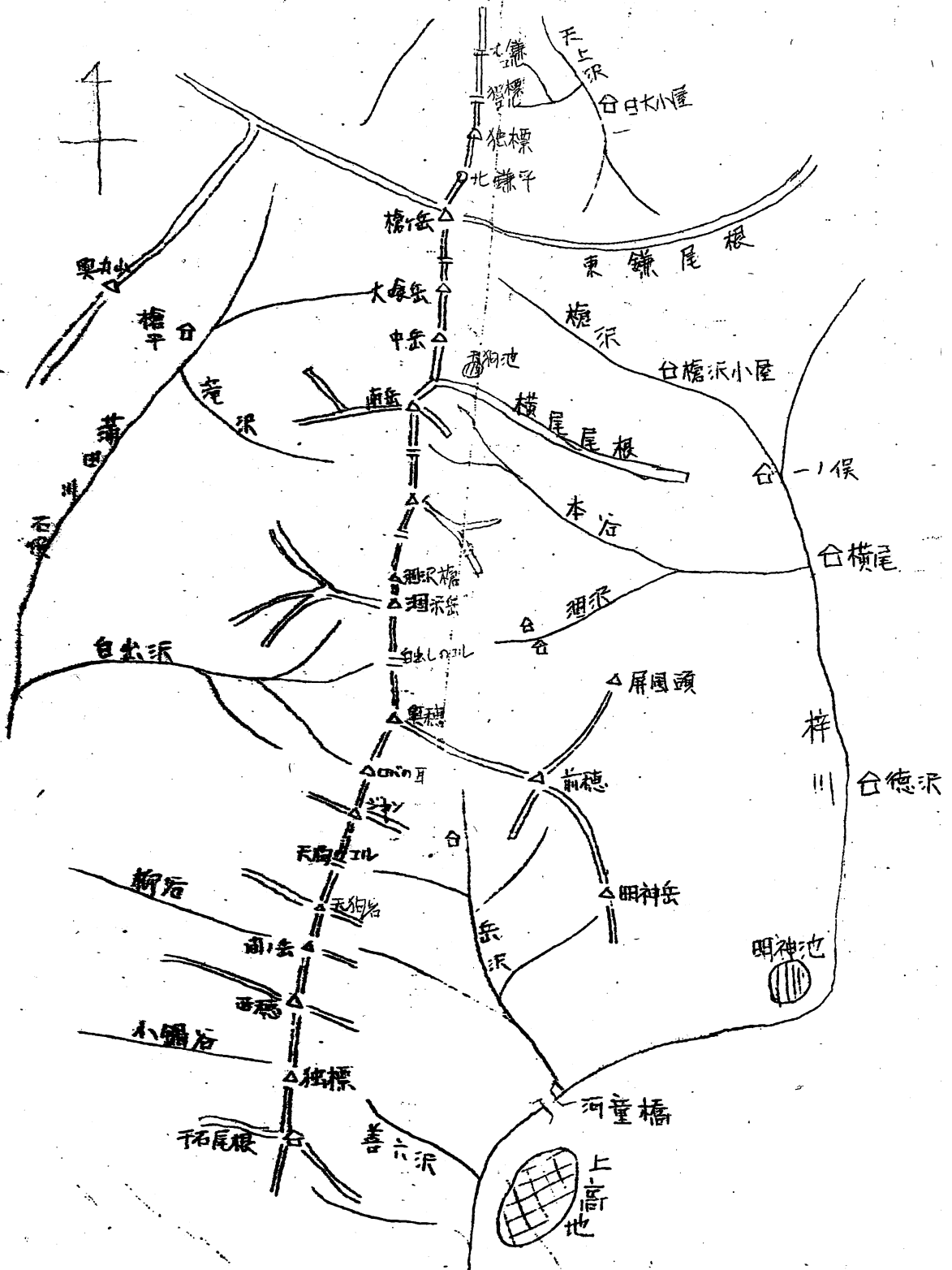
農学部 厚生課 " " 伊那 ②5255

医学部 厚生課 " " 松本 ③4600

理学部 厚生課 " " " ②2730

教養部 厚生課 " " " ③4600

3. 上高地, 狩沢概念図



4 訓練 内容

① テントワーク
 新人ワーク
 ader し慮生新

ワークのTentは、張る指導、うち、1つ、を、女、子、用、と、す、る、テ、ン、ン
 のに、等、の、名、事、化、を、に、関、考、年、み、
 等、の、名、事、化、を、に、関、考、年、み、
 の、名、事、化、を、に、関、考、年、み、

② 奥の技訓練 キックステップ

<主眼点> 一点支持とその確認(安全) → ピッケルはつかせない。

<留意点> やた、ツマ、に、先、に、足、を、後、へ、は、ね、上、げ、る、か、ど、う、か、
 ツマ、先、に、先、に、足、を、後、へ、は、ね、上、げ、る、か、ど、う、か、
 ツマ、先、に、先、に、足、を、後、へ、は、ね、上、げ、る、か、ど、う、か、

予、の、目、上、歩、落、の、ア、の
 ヨ、の、上、歩、落、の、ア、の
 ヨ、の、上、歩、落、の、ア、の
 ヨ、の、上、歩、落、の、ア、の

キックステップ
 キックステップ
 キックステップ
 キックステップ

③ トット

腹、に、い、に、な、る、と、腰、が、ウ、キ、
 腹、に、い、に、な、る、と、腰、が、ウ、キ、
 腹、に、い、に、な、る、と、腰、が、ウ、キ、
 腹、に、い、に、な、る、と、腰、が、ウ、キ、

① グリセード、カツテイングスツプはこういう技術もあるという程度に教えただけ。最初から今まで、教え込むと混乱しかちだし、特にグリセードは危険性も多いことで、止めておいた。

行動記録

◎ 4月29日 (松本より明神)

▽ 天気: 小雨 (午後から晴上加³)

▽ タイム: 文理発 (4:30) — 松本駅 (5:00 ~ 5:17) —
島々発 (6:00) — 鮫止め小屋 (10:00 ~
12:00 前後通過) — 徳本峠 (15:00 ~ 17:00
前後通過) — 明神 (全員到着 19:00)

ロメンバー

(C, L) 依々木

(理) 藤本 (L)・井口* 木村* 岡村 小楳

猪飼 池内

(2) 吉安 (L) 井蘭* 笠原* 新谷 山下 青木

(3) 扇能 (L) 難波* 大野* 牧 金子 矢野

山照

(4) 内藤 (L) 渡辺* 井上 市野 武藤 吉野

(5) 河原 (L) 出明* 宇都宮 村田 田貝

天谷

(6) 加藤 (L) 佐藤* 寺沢* 安岡* 服部

(長袖) 桜井 (L) 我田* 中田* 高島* 渡会

(長袖) 藤沢 (L) 森下* 陶川* 高島* 渡会

(* 今年度新入部員)

耳から耳: 前の夜の寝不不足な体で登山人だが、登山は、我々は、などとは、落石の美しい
この前の夜の寝不不足な体で登山人だが、登山は、我々は、などとは、落石の美しい
スリッパの詰めかた。大きい。登山は、我々は、などとは、落石の美しい
と物語る。我々信ずれば、我々は、などとは、落石の美しい
に分類するか、などとは、落石の美しい
。鮫止めまでの道は、落石の美しい
される所もある、この美しい

がすがしい小鳥のさえずりをもうき進む力強い
愛すべきではなからうか。黙々とつき進む力強い
partyの足どりにほほえみながら後続partyはえの
あとも追う。予想通りバラ気味の者・ケイレンも起
す者など黙止めと前後して現れはじめた。だが上級生
下級生、一体となって助け合ったことは、必ず我部
への愛着と信頼とを新人に教え、我部での活躍を約
束させたに違いない。苦しい峠であったとふりがえ
る余裕も与えずして不思義なことに穂高の勇姿が突
然我々の正面にクッキリ浮びあがった。毎年この峠
に立つとき一目穂高に会いたいと誰しも考えてき
たことであろう。その待ち望んでいた時が、今、こ
こに与えられたのだ！夕陽は静かに次の世界を目
指して山のかたに消えていった。

4月29日

▽天気：快晴

▽タイム：明神釜(8:40) — 徳沢(9:20~9:30) — 横尾Base
(11:00)

▽メンバー：29日と同様

▽あらまし：本当に素晴らしい朝である。空は、こん
なにも晴れてよいものが。今に、地球でも爆発す
るんじゃないかあるまいか。我々はそれ程青々と深い空
を疑いながら一夜の宿を後にした。やっぱり川の
流れは美しい。道路も山も変わっていない。あの曲
り角には炊き水があって、ちょっとむさ苦しい林
をぬけると河原に出て。一つ一つ暗かめる
。そしてやっと安心する。なつかしさがこみあげ
てくる。我々は毎年毎年同じ山に登る。それしてい
てあきることを知らない。山はそんな心も魅力

的なる母なのだ。その母は我々が何よりも無事
 である望んで願うに違いない。我々が毎年会いに来る二
 と河原に降ろして来ると、変な山女が手を
 振って呼ぶかかして来ると、やあやあ我れ二を
 は天に各高き遭難娘、石川悦子(上田O.G.)
 だが、彼女は、気味の悪いほど低姿勢であっ
 性。大した疲れを覚えないうに、横尾に到
 着ると、井上(シ)氏を捜して探がして彼等
 の話か、曾上訓練は週派と決めた。明日か
 の好天を祈りなから、シュラフはもぐった
 のは、たきかたも迫る冷たい風の吹まはし
 た頃だった。

◎ 5月1日 (本朝雪上訓練開始)

- ▽ 天気: 曇
- ▽ タイム Base (4:00) — 本谷橋 (4:45 ~ 4:55) —
- 洞沢 (5:50), 洞沢発 (8:15) — Base 着 (9:30)
- ▽ X-ナンバー

(A) 宇都宮(シ), 新谷

井関, 望原, 渡血, 出町, 栗林, 牧田, 陶川,

(B) 岡村(シ), 西山, 市野

難波, 大野, 佐藤, 井口, 清水, 中田 森下
富岡

(次殿) 木村

▼ あらまし: 朝から雲行があやしい。下が予定通り出発
 する。洞沢ヒュッテに最も近い斜面を利用することに決
 定。ここは30°~40°位。下は下めらかで必ず止る。朝陽の
 あたるのが遅いと、場所としてはまず文句ない。
 キックステップをやらせながら、空気が温暖にして、雪質悪く
 訓練そのものであった。約1時間半の訓練で、キ
 ャクステップにおける留意点を説いたが、急激に強く
 降った雨の中を引き返さねばならなかった。

◎ 5月2日 (雪上訓練)

▽天気：晴

▽タイム：Base (4:35) — 洞沢 (6:00) , (11:30) — 屏風頭,
八峰のコル (12:35 ~ 13:00) — Base (14:30)

▽X=11" — 略 (ほとんど昨日と同じ)

▽あらまし：キックステップ約2時間。硬雪なのでゴツゴツかきかたなり。歩幅が広い。ステップの跡が平行でない。ハッキリ腰。etc. 総て欠点ばかり。初めてなので無理はなし。その後 stop に入る。従来の回転を行く腹はいいにする方法を取り止め、腰を入れ半身の姿勢で止めさせる。ここで感心したことは、従来の方法よりも、新人の覚えが早いという利点がある。特に肝心なのは、腰の入れ方である。伸びきってもダメ。ハッキリ腰で吐き出す。背中から尾骨の辺りまでを一直線にする様子を保持してやるといいであろう。帰りは、キックステップで稜線に追いあげ、フリスツセートで楽しませて下山。

◎ 5月3日 (雪上訓練)

▽天気：晴

▽タイム：Base (4:05) — 洞沢 (6:00) , (9:25) — 穂高山荘
(11:10 ~ 11:30) — 洞沢岳 (11:50 ~ 12:00) —
本谷大橋 (13:20 ~ 13:50) — Base (14:15)

▽X=11" — C.L. 佐々木

- (A) 安間(4), 新谷, 西山,
- 難波, 大野, 井口, 渡辺, 清水, 中田, 森下,
- (B) 笠原(4), 岡村, 宇都宮, 寺沢,
- 井関, 笠原, 佐藤, 糸町, 栗林, 牧田, 陶川,
- [沈黙] 木村, 富岡

▽あらまし：さすが3日目だけめうまく行った。キック時間、本70分位。ステップカッティングとドリフトの型を教える。11時のように雪が本分を11時頃に降り止む。ザインをキックで洞沢岳に向う。leader の取り方について、上級生に注意されたあたりで、Party 全体に陰気なムードが漂う。洞沢岳の冷たい風は追い払われる

持って降させることにした。ビニール袋のを利用し、せがりを
後につかまらせて統一列車を走らせるもの。大き目のスベリ台
(大きくツセートの溝が本来ている)の中を走る者。皆、カッパ
い楽しんでる。雪上訓練で似らツゴかれても、これ程
楽しめる文句はあらず。余り恵まれている今年の新人
がツヤにさわる。

● 5月4日 (槍ヶ岳へ)

▷ 天気 : 晴

▷ 夕仏 : Base (4:00) — 赤沢岩小屋 (6:00 ~ 6:10) — 槍ヶ岳
(9:45 ~ 10:00) — 横尾山荘 (14:10) — Base (14:25)

▷ ツギ : C, L, 佐々木

(A) 安間 (L), 武藤, 岡村, 西山

井関, 芝原, 佐藤, 出町, 栗林, 牧田, 森下

(B) 田貝 (L), 清水, 宇都宮, 扇能

難波, 大野, 渡辺, 井口, 中田, 陶川

▷ あらたし : 連日行動の新人にとっては大変な労働に違いない
が、明日の天候を安ずる上級生と比ぶれば是非、この一昨日
かせき下い。これも新人が十分にツゴかれた、本当に
楽しかたに満足して欲しいから、骨がカクカクするよう
老体にムネウツくたぐとしても最大の努力をする言がある。
休みには、地図をひらいて現地裏の確認法。歩きは
から岩峰、岩壁や山名の学習は、頭の中は知識の
整理に忙し。槍ヶ岳の雪は余りに遠くてつらい。
雪中、思い出した様にスツゴ訓練を行う。再び
キックでキャラバンは続く。ようやくたどり着いた槍の
肩で待たされたが、冷たい北風に追いつけられるようにして
直下200mほどのツセート。肩から槍の穂先に向って2
3年生を待機して、楽しいツセートはえんえんと続く。
赤沢岩小屋をすぎると、雪解けと共に顔を出した
“フキノトウ”を採集して帰る。夕食のおかずに、この
山の幸が用意されたの言うまでもない。

◎ 5月5日 (沢殿)

▽天気 : 晴

▽あらまし : 木村の要望で、吉野から洞沢見学に乗りに行く。その他の男子は上高地、明神の散策とチャレ込む。ふっくらとした顔立ちのお嬢様方は履面を拭き、水冷法を行ったり美容に余念がたつ。新谷名匠の説明における「疲労蓄積」が、その主たる原因だとのこと。我々は信じる。せうたうたのかと!

◎ 5月6日 (雪上訓練)

▽天気 : 晴

▽タイム : Base 発 (4:00) - 洞沢 (6:30 ~ 8:30) - 北穂高岳 (10:05 ~ 10:45) - Base 着 (13:00)

▽メンバー : [A] 狗飼 (L), 米倉, 新谷, 宇都宮, 佐々木, 井上, 出町, 井口, 佐藤, 渡辺, 大野, 井関, 難波, 笠原, 栗林, 清水
[B] 西山 (L), 笠原, 牧田, 中田, 森下, 陶川, 木村

(但し B party は蝶ヶ岳へ)

▽あらまし : 約1.5時間の技術の総仕上げを終り、今合宿最後の目標峰に元気よく出発する。美しい直線となって進む隊列の、次第に小さくなるをカメラに収めて Base へ先行させていただく。

今夜は合宿、打ち上げコンパだ。多忙の中を折よくかけつけて下さった百瀬監督を混じえて、にぎやかにファイヤーストームの明りをとす。

“合宿、好天、おめでとう!”

Leader として、本当に何もできなくて済まなかった。己れの余りにも無力なるを知らされて、たゞ、ぼう然とその炎を見つめていた。

◎ 5月7日

▽ 天気 : 雨のち晴

▽ タイム : Base発 (5:05) — 徳沢 (6:05~6:15) —
— 明神 (6:50~6:55) — 上高地 (7:35)

▽ あらた : 雨の中のあわただしい徹夜作業を1時間程度で済し、上高地へと発つ。とにかく新人の速いこと速いこと。女子 party などはあれよあれよと驚くばかり、舞うようにして霧の山影に消えていく。風と共に去りぬとはこのようなことか。上高地に先行した二年生のおかげで、我々のバスはまるで貸切同然。下山を心ゆくまで戯れ通した。

(おわび-----主観的な記述をお許し願いたい。)

6 各係報告

(どの) 会計報告

井上紀樹

収入の部

$$2800 \times 13 = 36400$$

支出の部

a. 交通費

往路 $80 \times 13 = 1040$

復路 $400 \times 13 = 5200$ 荷物代 1800

b. Essen費

$$1800 \times 13 = 23400$$

c. 装備費

石油 750

メタ 100

キャンドル 600

クレマ 790

洗剤 90

ホムズル 150

西洋紙 380

その他 90

計 2950

支出の部合計

34390

残金 2010

。以上単位は円

(その2) 医療報告 武藤 一郎

オキシフルを忘れた。マキユロで消毒が出来るかもしれないが、大きなけがの応急処置にはかかせないものである。ので忘れてはならない。
使用したものはマキユロ、クレオソート、カセ薬であった。
どこからマキユロと靴スレ用バンリウコウがなかったと聞いたか、入ったつもりであったのか、おとしたのか、忘れたのか、ご迷惑をおかけしました。
合宿前に医療係はとろえるだけでいいと聞いたが、医療品を持っていた方が便利だと思つた。

(その3.4) Essen, 装備報告 井上 紀樹

Essen 係にしろ、装備係にしろ、全てこれはあの部の仕事だからと云った様に、それぞれの係と係との間の連絡、部と部との間の連絡が、あまりなされず、結局それぞれの部が、独りでやらなければならぬ様になつてしまつた。全体としての Essen 係、装備係と云つた点に欠陥があつた結果、それが一年生が実際にやるに當つて、何にも分らず、時間を食ひすぎたり、荷上げが、そろつていなかたり等の点に現われた。

「準備として入山前に個人装備を、満足に見てもらえない、一年生が居たり、これは時間的なもので、靴の注文等も、少々ギリギリの感があつた。団体装備では、伊那松本の装備を、自分達の練成合宿を大事にするあまり、隔出通の効かせられない事があり、部内どうして、ゴタゴタする様な変な事もある」

また Essen 等も、実際に、その計画を分た上級生(特にすぐ上の)居なくて、何をどう作るのか分らないと云つた場面も生じた。

こんなことは、それぞれ相手の立場に立って考えられるだけの中を、持っているなら、全然関係なく終つた事だろう。

結局、何にしてもそうだが、自分達の合宿ばかりを大事にして、SAC 全体としての動きと云う事を忘れた、為には、こんな事になつたのではないかと思つのだが……

7. Leader の反省

準備段階での数多くの失敗は私に何を教えてくれたのでしょうか。それは私に各部の部員を信頼し過ぎではなかつた。身観視してはならない。Leader の責任は非常に重く私のような貧弱な者にはどうして耐えられないものがあることを教えてくれました。

最も悪い点は、私の認識の浅かったこと、ズグの足りなかつたことだと思ひますが、合宿をまとめたつに至つた時の基本線を守り抜くことが出来なかつたことと大きな誤りを犯す結果となつたように思ひます。これらのあらゆる欠陥については深く反省して思ひますが、このような失敗を防ぐには Leader 一人の力ではどうにもならない事を御理解願ひたいと思ひます。

私の常々考へていた矛盾が再びよみがえつて来ます。

S.A.C 内の各部の利益代表者会議に対する矛盾。そこから出てくる部意識の根強い「批判」の異常な性格についての矛盾。

信天山岳部の発展はこの様な戦乱の世から脱却することなく望めないことと言へましょう。

私は少なくも S.A.C のために何か仕事をしやうと希望に燃えておりましたが、完全に歩まんとする方向を見失ひました。

新入合宿の不幸際を心悲しく思つたのであつた。しかしそれ以上に残念なのは、S.A.C 運営に肉する自信喪失だといえるでしょう。

私は経済的條件、千年であること、その他色々困難な条件をかかえておりました。しかし、あくまで S.A.C のために努力を続けたいと決心です。

合宿の反省の中で、皆の御協力をお願い致したいと思ひます。

8. 新人の感想

苦しめた、苦しめた新人合宿。

足元をみつめ、ひたすら歩いた新人合宿。

先輩にどなるれ、どなるれ、しやにおに登った
新人合宿。

雪の急斜面で足をふるめせた
新人合宿。

E S S E'N が待た遠しかった
新人合宿。

白い残雪に、黒い岩壁に心を躍らせた
新人合宿。

長いはずの九日間も短かった。

山の友へ
1 緑が淡く 野にもえ
残雪 白く 山肌を
友よ登らん 信濃の山に
友よ忘れじ 信濃の山を

2 可恋な花が 咲き出する
黒い岩壁 青い空
友よ登らん 北下の峰に
友よ忘れじ 北下の峰を

新人合宿についての感想

1年 井口隆夫

世の中に180度の転換という言葉がある。
何か平凡な我々にとって縁遠い感じがするが私はそれを今度の合宿を通じてしみじみ味わった。入山前のそこはかきなり不安から、下山した時の何とも表わしようのない楽しさへである。浪人する事2年の私にとって、その名も高き信州大学山岳部に対する不安は相当なものだった。自分の体力でついていけるだろうか？ シゴキは本当にあるのだろうか？ 食事は三度必ず食べられるのだろうか？ 先輩達はいつの顔から変わるのだろうか？
どれをと、見ても山に対して全く無知としてお、私にとって、ザックの重さ以上のものであった。徳本、羽沢、テントでの生活、雪上訓練など今は笑って思い返す事ができるのだが、実際行動中の苦しかった事、皆一度は必ず味わう事だろうから、そう自分に言いかけせて歩いた。多りに雪の上を転がった。山行を通じて自分なりに得たものはたくさんある。取り上げれば限りがないから省まますか たった一つ強く思った事がある。
"リーダーに従う。バストをつくす。" 合宿に参加し、訓練という新人として下山した。この経験は他の社会では味わえない程、大切なものにちがいない。これを生かし消化するには何年かかるだろうか 解らない。しかしこの合宿は自分にとって一つの区切りになったと思う。 オワリ

新人合宿

井南 芽郎

昔しおの文理を出た時から台まっていた。馬までの道のりの長い事、長い事。そして、鯨留のあたりから絶頂に達していた。両手はしびれ、両足はしびれを起し、ついにダウンしてしまっただけ、先輩諸氏に助けられ、励まして、どうやら山に達する事ができた。そして雲向に姿をあらわした稜線を望んだ時、今まで苦しかった事を一瞬忘れてしまふ程だった。初めての雪上訓練、期待に胸をふくらせていたのだが、徳本達を越える時、ザックに絡めつけられた腕がどうも動かさず、ピッケルを構えることが出来な。どうしようもなかった。結局、滑落停止の技術を習うことは出来なかつた。夜の行方などを横で見ただけに終ってしまった。しかし、キックスツップは人一倍一生懸命やった。今僕にはこれしか出来ることがない、これだけでもきちんと身に対処しようと思つて。

ピークハンティングの藪こが頂上に達すると安心感と同時に喜びが湧き上ってくる。足元は初見つめであった目が周辺の山々を眺め回す。山で最高に

楽しい嬉しい時だ、とて下りのリセード。登り苦になどお頭に残っている。
ただ下り楽しさがあるだけだ。後に存て二人を考えた。山に登るというは、山を
下ることに楽しさ喜びがあるのではないだろうか。
最後に撤収間際の氏が僕に話して、異なった言葉が今でもおぼろりと頭に
残っている。「今回の経験をこれからの山行に生かし、とて将来新人を指導
する時には今回の経験を忘れずに生かして指導するようにせよ、あかん」と。

新人合宿の反省と感想

笠原敬一

遠く故郷を離れ倉大に合格し山岳部にに入った。高校のときエカっていた夢は
けって破れなかった。

かって「ウェストン」が越えたる徳本峠。山は、そのバ、そのバの行きあたり
ハッキリではない。遠い昔、先人達が存したことを偲ひながら歩くことも
感激の一つである。峠から見た明神、前穂のピークがすばらしい昔「ウェストン」
の頂はこれが穂高の三峰だと思って同じように峠からあおりのたろえ
白く残雪、黒い岩、なにか神秘性をおびた近寄りながら山頂を感じた。
松島時代からの人々が情熱をこめた山々にこんどは僕らの番が
あつてきたのだ。人となり何をか存させ、だが、人存気持とはうらほらに現在
下界において学生の基を勉強一つこえ急、こいるではないか。あの時、感激
教とけいにかいた闘志を常に忘れる事なく存にこにまげよう。

その晩から始まる炊事等の手間の掛った事。もと細い計画を知ってお
べきだと思ふ。なるとなく、いけばなるとか存さうという気持があったので
ルートや山の名前や炊事の献立てと材料、雪上技術等を調べて存たため
だつた。あやふやとかいふから存いということも、やさしいことをすつた、たいへん
時間が掛るものだ。ヨリヨリをつかりは早く出来た精神的には楽だ。

涸沢での雪渓訓練は自分なりにせいひつぱり一生懸命やつたが、おもと
おとも、やればよかったと思ふ。自分の限界を知ることは大切なことだと思
ふ。それに一日が終つたおとも、おさっぱりとした気分が味あえた。だつた。

のかけようとするのはよく存い。おれ自分のやりたことかあったら、おれに前進
する。涸沢岳、槍ヶ岳、北穂といずれのピークでもピークに立つ
ことはうれしかった。おとも、下りの尻セードがあったからかおれは存いのか、
夏も良いけれど、5月の残雪期の方がおとも、良い。雪があつたおれは雪とけ
ちかて、山の雪という自分の対象としての生きたものおれ存感がある。

おれを蹴りおれおれ山頂にたつた時の気分には満足感がある。おれ、連
存白く峰々を眺めながらつれづれに未来への希望と闘志が湧いていた。自分の
登った山々を見た。おれ存いおれ存いおれ存い。おれは、その当時考えていた

よして参加に宿舎人刺とことひりて最後に思つたか
よして参加に宿舎人刺とことひりて最後に思つたか

一修野大

る沢ツの登ちり。うら一でのさく
あにバ次が登りか又し昨日は
で登と。しでいれかに昨なも
行講配たつれらてこりうら色
山の分つすえつれ。下より雪
の理の泊し。るらたのう神。上
て文等で少い。あ鴨つた。の歩
めは料煮は長つ怒りま。の歩
はじめは食誠オに雪くは神。次
は日。思のいとし。明下。度
て前備は始みだ荒岳よ。斜りな
る紫日始みだ荒岳よ。斜りな
いはてのはカミに山せ傾着
ははつえンハて輩えるるに
ににま。こてテ先くあ所らて
部山集た。カバらよも山るや
岳。かし峠。てかには日沢れと
山宿員を本意れ前当ハの寝何
の舎部ク徳い疲ら本先雪晩も
学人のシはてがかりた勞のれど
大新山千日。うら後らま苦え
疲あの大園。ま岳登疲なでか
がで山後日はよの

事である。どうすれば当然の事である。それに愚知をこぼし何になる。

新人合宿雑感

佐藤正敏

期待もあり不安を感じ 唯ひたすに準備をし 元張った新人合宿が終ったから もう2週間になる。そして次の6月の山行が待っている。ザックが肩に痛いので ピッケルの持ち方を変えたい 変えたいと思いつながら 2年生の足ばかりを見つめて 徳本峠への長いアプローチと短い登りを終って 峠に着いたときの解放感。これから もう下りだけなんだという時の気持はなんと晴々しいものであろうか。それにしても小生のパーティのリーダーはこゆい人だった。そして次々と登ってくる他のパーティを見、また自分のパーティも含めて、バテた後の仕末は先輩が責任を持ってやってくれたのは安心した。

今合宿は反省会にも出た通り、向題の多い山行であった。ある小生は内部のことは知らないが、いろいろな矛盾を感じた。そして向かいをわけて自分の体力のなさにはあきれた。とにかくトレーニングをすることが必要である。もっと自分を鍛くことが必要だ。確かに天候や身体条件のよい時には いろいろな作業をやるのはとても快調だし 向題はない。しかし雨が降ったり 夜たたり 極度に身体が疲労していたりする時には 恥かしいことながら できることなら他人がやってくれる方がいいと思ったことごとが ますます 本当に恥かしいことである。悪条件のときにこそ 他人をいやがっているであろう仕事をしなければならぬ。小生はもっともっと自分を鍛かなければならぬ。そして小生は余力にも不勉強であった。お金もなかったし 暇もなかったのに 仕事がなかったが、もっと本を読み地図を頭にたたきこんで かなければならぬと思った。

雪上技術をたさん教えてもらいましたが 自分はほんの少しか覚えることが出来ませんでした。それにストロップやクレードのまねごとくらいはできるようになりました。登りになると は フーフーって 頂上に立てば 実に卑しくなり テントに帰って 腹いっぱい飯を食う。そんなことのくりかえしのおようであった。合宿でした。(小生にとっては) そして無能な小生を導いてくれた 諸先輩に感謝しています。

43年度に入部する諸君のためにも お礼を言いたく 新人合宿ができるよう 今後皆で努力していきたい。

初山行から

陶川 絹子

新人合宿のつらさ臭しみは、他の友と同じだ。自分としては最悪のコンディション(下痢、生理、関節指カゼ)の中で、友の無言の励みを感じて山行を続けた。一生懸命歩くことで、友、いや人間の足の強さを感じて、先輩の暖かい心にも出会った。

高校時代に松本よりもはるかにおぼろしい北アルプス、御岳の連峰を見ることのできる高山で、私は「いつかきっとおまえに会いに行く」として、そのふとこころに「いつか」を、その日まで「走り続けるんだ」と誓った(スキーの為に走っていい)ことを徐々に今は果してゆきつつある。

山へ行く仲間が揃ったことから山岳部へ入った。合宿の前は準備に専らこまごまの忙しい日々が続いた。そして山で、山の友を知った。またまた「ガイル=命の関係は浅い気がする。今後の山行に期待する。

山を愛する部の人間関係では、このアレイブから離れられないうほど、強い何かがある。私我等の心で成長して行くとする。

山の友達を自分から離れてみた時(足のむくみ、関節の痛みに耐えられず、退部、退学科を思った時)血となり肉となりつつある山岳を止められようもないと思った。

できる限り、足の養護に務めがんばってみようと思う。「体を作るのは精神である」

出断意

新人合宿の初日は、徳本峠越え。島々の厭を出てから自動車を通る道もしばらく歩き島々谷に入った。川どいの道をすんずん行くと、村田さんの「猿だ」という声、右手の上の方を見ると猿が4、5匹木の上にいる。他の班をぬきつぬかれつしながる鱧止め小屋まで行き、はり紙に通過時間を書き残しておいた。いよいよ急な登りにかかると足が思うように動いてくれない。「しっがりしろ」とな声がとぶ。こっちは下を歩いて歩くだけ。「上を見ろ。すぐそこに峠が見えるぞ。」の声に上を見たときたんにひっくり返

35 着る。ろとかが、のて、窓、テ、ン、ぬ、と、と、練、が、つ、つ、ん、な、れ、ん、生、シ、た、の、と、
 は、休、が、ら、ち、い、班、ネ、た、い、設、ス、テ、よ、っ、が、の、腰、一、終、さ、し、か、ど、年、も、来、段、の、と、
 り、で、皆、た、う、な、の、た、つ、着、に、ッ、の、び、も、声、ア、事、が、下、ア、フ、ど、二、日、出、普、段、の、と、
 か、ま、っ、お、か、つ、し、な、に、キ、た、は、「、な、ッ、」、た、習、ム、は、テ、ッ、は、ど、二、日、出、普、段、の、と、
 屋、く、た、思、着、一、に、な、く、場、に、キ、た、は、習、ム、は、テ、ッ、は、ど、二、日、出、普、段、の、と、
 小、着、つ、と、ろ、が、て、う、な、ト、で、キ、た、は、習、ム、は、テ、ッ、は、ど、二、日、出、普、段、の、と、
 め、が、ら、だ、ち、班、え、よ、が、コ、シ、沢、て、は、の、い、あ、い、言、る、先、で、知、屋、肩、る、セ、口、握、の、と、
 止、班、も、繁、つ、の、考、る、チ、テ、た、獨、つ、は、の、い、あ、い、言、る、先、で、知、屋、肩、る、セ、口、握、の、と、
 鯨、の、て、は、え、他、を、れ、モ、の、も、獨、つ、は、の、い、あ、い、言、る、先、で、知、屋、肩、る、セ、口、握、の、と、
 岸、他、せ、り、て、が、分、張、。、尾、た、訓、練、強、く、た、ッ、た、を、が、ろ、す、出、自、て、馬、沢、で、シ、ロ、シ、カ、ッ、な、
 本、る、た、ろ、い、の、ろ、か、。、で、横、も、訓、練、強、く、た、ッ、た、を、が、ろ、す、出、自、て、馬、沢、で、シ、ロ、シ、カ、ッ、な、
 徳、あ、あ、発、と、着、備、ぐ、う、尾、た、何、た、雪、雨、に、ス、リ、い、ひ、た、お、ル、へ、わ、ん、ッ、セ、ど、ン、な、た、く、
 で、で、に、出、を、へ、装、つ、る、横、つ、が、つ、の、が、ト、ッ、つ、た、上、を、他、の、沢、が、下、横、入、シ、日、不、休、ま、ッ、う、
 と、う、火、で、足、神、一、か、な、だ、か、て、た、ン、キ、へ、つ、な、き、と、岩、廻、着、小、ク、を、今、で、が、し、テ、か、
 こ、そ、の、つ、に、明、い、十、一、か、く、か、め、つ、テ、で、「、か、う、わ、る、風、後、の、の、へ、ッ、沢、が、不、休、ま、ッ、う、
 の、た、屋、何、雪、。、な、ン、は、神、輕、營、が、初、行、。、所、「、が、か、「、や、屏、の、分、日、岳、キ、槍、た、か、ッ、か、
 と、っ、小、へ、た、れ、テ、で、明、が、設、面、は、を、す、。、じ、れ、足、つ、」、と、と、習、自、昨、ケ、を、し、お、殿、へ、ッ、な、
 っ、だ、く、神、い、っ、張、ろ、の、は、物、ト、時、日、習、返、た、。、同、け、が、を、る、け、總、練、。、二、槍、上、で、を、。、沈、に、キ、も、
 や、ス、ら、明、な、行、も、た、た、日、荷、ン、に、一、練、き、っ、も、り、る、足、い、つ、前、る、め、の、ま、ド、い、下、。、
 。、一、ば、ろ、も、て、ト、し、つ、月、分、テ、常、月、の、引、あ、日、か、く、「、を、ろ、日、を、改、日、雪、上、一、な、日、以、日、
 た、。、一、ば、ろ、も、て、ト、し、つ、月、分、テ、常、月、の、引、あ、日、か、く、「、を、ろ、日、を、改、日、雪、上、一、な、日、以、日、
 っ、分、。、い、う、下、テ、到、ま、で、か、に、ッ、ト、れ、し、ん、習、う、に、て、が、る、。、道、は、り、事、半、は、

くはよ様めにはだ
 し今ん休くうは
 めとせのまよて
 ろるま前ひに
 うめ干登をけ
 をさば出舟行
 葉がぞりとに先
 言目うし「樂で
 の朝どや少し持
 あ朝どや少し持
 とはかた行もい
 」らめつてで甘
 いかでたいまも
 な日バ持つ涙っ
 なの気も潤い
 や次日な日かり
 じた。今う今い。ほ
 いた。よしせっ
 しいかるよたや
 苦し新「つた。い
 苦り了新「つた。い
 ましたと「つた。い
 本思はうの時かた
 しめ綱の短う
)がかる
 ろがほ
 るがほ
 ては
 め苦樂に

足さか
 かつ尾
 横は
 食おな
 の子
 は半
 った
 眺と
 ほふ

しんは横
 はにうるも日
 上ダとが峰
 連み合
 るは
 天次へ頂も
 でアふなけ
 へ頂も
 下はすしい
 下いた

の速たし調腹っ生る
 たさかた
 気分私また
 感頭
 残つ

シー
 がた
 祝良
 はら
 続激
 残つ

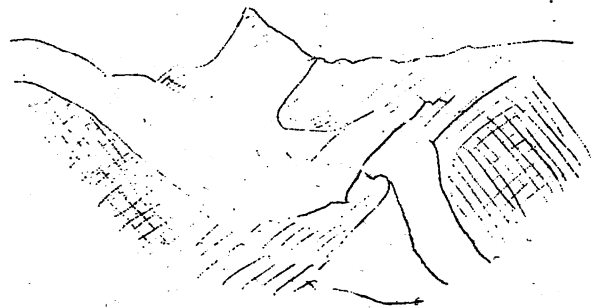
りと
 だっ
 が空
 てく
 祝良
 はら
 続激
 残つ

帰こ
 川ま
 ました
 今心
 裏頂
 てな
 南三
 と象た

の速
 っか
 のり
 小非
 登て
 頃し
 可穂
 暗事
 とた

か
 の
 最
 は
 下
 の
 分
 り
 す
 の
 煮
 た
 た

本思はうの時かた
 しめ綱の短う
)がかる
 ろがほ
 るがほ
 ては
 め苦樂に



色々不歩の思は黙したすは女子は
 晩、睡もた私別男気がたは女子は
 の時、あつた。は比言な本なせ
 日はんだ。割かこの葉木はて事を
 子朝は二もが、な言いでれな差
 た。朝は二もが、な言いでれな差
 子寝た。いおはが、な言いでれな差
 妙りつにに程思の子何はどしな
 下まが肩けたと、とのかどしな
 森るなはまいたが、いるたは歩
 くはつおてし荷負見したは時
 て寝るでし損の荷を脱かな差
 めえガリ像で達をの出にんか
 省始為いく想れ私荷るを崗二カ
 反にを重っはま。のい々の体た
 とフ行。ゆえ生たいて島つたの
 う山たが越にっ佐いっかえたさ
 シエのたが越にっ佐いっかえたさ
 上先だっボ峠せか好歩道にっかえ
 と足下徳つわ如々。私のなりとし
 今し子減子私横技人けい日の人づの色なだを

葉がとはてがみ前「次来と前元。は兄は水た行
 で達うてったるもおて。出たにるれ時雪い色岳
 中輩か練いて中してつた。黙たか見作な、淡な派
 の先だ訓とて中してつた。黙たか見作な、淡な派
 男子は子と。ははうす、な。に。色で二思る秋
 男にせ雪る。ははうす、な。に。色で二思る秋
 た。私。す怒た。うさうよているの人。だをか登
 っ。れががに。行二下つ。い。な。ん。所。何。た
 かなわうが。行二下つ。い。な。ん。所。何。た
 し。か。思。だ。う。一。子。し。い。る。と。作。だ。も。休。が。美。も。げ。出。か。つ
 楽。劇。と。い。よ。り。子。て。っ。か。り。を。げ。行。な。も。と。く。の。静。終
 ほ。ま。だ。は。た。の。ビ。テ。い。ち。後。く。間。お。ん。だ。ば。と。と。何。た。冗。が。も
 宿。葉。熟。は。い。子。一。バ。追。後。く。間。お。ん。だ。ば。と。と。何。た。冗。が。も
 合。言。た。ア。て。せ。い。い。ち。後。く。間。お。ん。だ。ば。と。と。何。た。冗。が。も
 人。う。っ。た。れ。も。へ。ま。ま。う。は。と。葉。ほ。く。ほ。白。見。た。ま。の。休
 新。い。か。た。う。っ。行。し。の。息。人。言。は。行。を。の。も。る。い。間
 と。し。れ。怒。い。洞。て。て。し。の。時。て。ン。習。さ。来。て。る。の
 さ。く。く。は。ら。出。れ。が。前。う。る。ハ。バ。と。美。出。思。て。っ。か
 や。て。よ。ど。か。が。離。い。声。う。か。ほ。て。に。き。青。の。ど。し
 が。に。し。が。ち。尾。芳。と。け。い。日。の。い。人。づ。の。色。な。だ。を

おっついでバマシ
 うき登じバマシ
 恵ばし少にる
 リれまをのすた
 埋あ励一たバつ
 がりをギつたか
 足登か事か
 に。自ネな短か
 中た。とエいっは
 のつれ！のてあ間い
 雪登れの日が日ない
 てて張のバラが日ない
 テし頑次て時9日ない
 バに。はっしつれ
 はううの思を思恋
 りようの思を思恋
 登うあちうこたは
 ははも悔ニつたは
 どず所後おかつたは
 なかた、てなまの
 時動る今、てなまの
 ったに平。残よるべド

穂高よさろば

1. 穂高よさろば またくる日まで
 奥穂に映ゆる あかね雲
 返りみすれば 遠ざかる
 まぶたに残る ジャンダルム

2. 穂高よさろば またくる日まで
 比穂に続く 聖の原
 返りみすれば 遠ざかる
 まぶたに残る 穂ヶ岳

3. 穂高よさろば またくる日まで
 前穂に続く 岩の峰
 返りみすれば 遠ざかる
 まぶたに残る 又白池

4. 穂高よさろば またくる日まで
 西穂に続く 岩の峰
 返りみすれば 遠ざかる
 まぶたに残る ピラミッド

5. 岩場よさろば またくる日まで
 畔神岳の 岩の肌
 返りみすれば 遠ざかる
 まぶたに残る ルンゼ